

稲刈りがあちこちで進み、懐かしい藁のにおいが散歩して感じられる季節になりました。子どもたちの作った案山子の「カマキリ爺さん」が誇らしげに田んぼを守っています。

つい、1週間前までスイカを美味しく味わっていたのに、今週は、リンゴ、ナシ、ブドウ 突然秋の味覚に大変身しました。秋の空、さわやかな風などが、身体感覚を変えてくれたのでしょうか。やはり、飯綱町の季節の流れは最高です。

リンゴと言えば、大地へのアプローチの名物、開園以来リンゴのアーケードをくぐっての歴代の子ども達を見守ってきた入口の片側のリンゴの木を伐採しました。大地の所有の畑ではありませんが、ご縁で伐らせて頂きました。入り口から2本目を切っているとき、突然 チェンソーの歯から大量の水が溢れて体中びしょびしょになりました。チェンソーには燃料とオイルしか入っていないので、ガソリンがかかったかと思いき、まずいと思いましたが、無味無臭。何と、それは、木の幹からの大量の水分が噴出したのでした。もしかすると、これは、木の涙じゃないのか。背筋が寒くなり、思わず、私も涙がこぼれてきました。たぶん、この畑は30年以上は過ぎていることでしょう。その歴史、リンゴの生きざま、見守り続けてくれたリンゴ、様々な思いが込みあげました。本当にありがとう。合掌。

大地への光景は変わりましたが、この土の道を踏みしめて、毎日期待とうきうきとした気分で、心躍らせて 子どもたちが来れるように、変わらぬ大地を真心をもって、維持していこうと思っています。環境も人間も精神も。



【我が家の登山スタイル】

我が家の登山スタイルは、子どもたちを引き連れたの登山や現在の夫婦の登山でも、いつも私が先頭でした。この夏、よく山へ行きましたが、夫婦で登っている光景を見ると、奥さんが先頭を歩いているタイプが多く見受けられた。妻に話すと、確かに、自分のペースで歩くことができ、必死について行こうということではなく、安心だと。でも、未知の道や危険な鎖場やガスっている時はそうはいきません。

家族での登山では、父親が先頭で、間に子ども、母親が最後尾というスタイルを貫いてきました。確か、若いとき何かの本で読んだのか、それとも自分の理想だったのかわかりませんが、「**重い荷物を父親が背負う。その荷物には家族全員の暮らしを背負っているという思いが詰まり、子どもたちはその背中を見て必死に付いていく。だから、甘えてこない、最後尾でも、母親が荷物を背負いながらも、見守り、ゆっくりと歩いてくる。母親はしんどくても、子どもたちのたくましく歩く姿を見て成長を感じながら楽しみながら登る。子どもたちは前方の厳しさ、後方の暖かさに包まれながら、ひたすら、家族同じ方向へ、緊張感とすさまじさと我慢とそして、頂上での同じ充実感と達成感と感動を目指して歩く**」というカッコいいロマンを持って山へ登ってきました。

「お父さんはいつもさっさと先に行って」と何度も後方でささやかれたかわかりません。従来の短気の性分もありますが、何よりも、登山は、先に何があるかわかりません。十分な下見があるのでもなく、大体、家族登山の場合は、半分以上は、初めて家族で登る山でしたから（もちろんガイドブックで調べていましたが、今ではネットでほとんどわかりますが）、出たとこ勝負。タイムテーブルから危険箇所から、先に行って調べておかねばなりません。家族全員の命がかかっているのですから。ましてや、山小屋ではなく、全てテント泊ですから、天気と時間が全てです。天性の直感と運のお蔭で、自信満々に案内して、後日「実は、お父さんも初めての山だったんだ」ということが、半分以上でした。

子どもが生まれたら、こんな登山を楽しみたい、登山だけではなく、子どもに合わせるのではなく、我が家の夫婦の楽しみやスタイルに合わせて、青山家を楽しみたいという家族ライフを行なってきました。いつでも子ども優先ではなく、夫婦優先、家庭優先など、つじつまを合わせて、バランスをとっていくことを考えてきました。

子どもと一緒に過ごすことの中で、「子育てを楽しむ人・子育てに苦しむ人」の一つのキーポイントは、「夫婦や大人の暮らしのペースを維持できるかどうか」だと思います。自分のペースを崩されたら誰でも楽しくはありませんね。子どもが大好きだからと、カレーライスを毎日食べていたら、大人は楽しくはありませんし、毎週末、遊園地では、だんだん苦しくなりますね。「子どもが思うようにならない」「子どもが言うことを聞いてくれない」などという理由で、子育てが苦しくなる人も多いですね。でも話を聞いていると、いつも子どもを言いなりにしていたり、子どもにお伺いを立てていたり、追従していたり、全て、子ども優先だったり、子どもに決めさせていたりしていると、結局、子どもに振り回されてしまう、つまり、子どものペースについて行かねばならない、そうすると、大人のペース、社会、暮らしのペースが乱される、だから、子育てが辛い、苦しい というジレンマに陥っていくような傾向が見受けられます。

※仮題「子育てを楽しむ人、子育てに苦しむ人」共通のポイント こんな本を書くのが現在の私の目標です。子どもが6人位いても楽しむエネルギーな子育てをしている人、逆に少人数でも、苦しんでもがいて子育てをしている人、この違いはどこにあるのだろうとみてきた結果、どちらにも、たくさんの共通ポイントがあることがわかりました。これを提示すれば、少しでも楽しい子育てができるだろうと思います。

子どもを尊重しながら、人生の先輩である大人の社会の流れ、ルールに乗せていく、我が家の夫婦のペースとつじつまを合わせながらやっていく、子どもの衝動的なわがままに合わせてではなく、子どもに振り回されない我が家のルールを教えていながら、暮らしていくことこそ、子どもと共に夫婦の人生、家族の暮らしを満喫できるポイントですね。

大人たちが、我が子可愛さに、子どもにあまりに近すぎる、子どもは大人がいない所で育つのであり、誤解のないように言えば「子どもにとって、大人はストーカー」のように、子どものすべてに関心を持ちすぎではないかと思ってきました。子ども中心になりすぎると、大人の暮らしのペースが乱されます。大人には大人の趣味や興味、暮らしの趣や雅などがあり、子どもが踏み入れない領域や文化や分野があり、子どもが我慢しなければならないこともあります。

最近、小林正観さんという人の本を紹介されました。とてもスピリチュアルな内容でしたが、とても感動して、すぐに他の本を買い求めて読みました。最初の本は「そ・わ・かの法則」追加で買い求めた本は「宇宙を味方にする方程式」です。この本の中に、「子どもと向き合ってはいけない」という欄がありました。私には、ピタッときましたが、みなさんはどうでしょうか。一部抜粋して、お届けします。もし、興味があれば、お読みください。

脚光を浴びている業界、人気のプロスポーツなどは、
頂点を目指す人のたくさんいる、
いわば「大きな三角形」をした世界です。

一方、トイレ掃除や梱包のように一見すると地味だけれど、
自分が独自に作り上げた世界は「小さな三角形」の世界です。

大きな三角形は、遠くからも目立つし底辺も広いので、
その世界に入ること自体は簡単ですが、
その三角形の頂点は遙か遠くにあり、そこに辿り着けるのは
ごく一部の才能に恵まれた人だけなのです。

一方、小さな三角形は、入り口は狭いのですが、
その世界に入れば競争も少なく
比較的早く頂点に上り詰めることができます。

例えば、プロ野球で頂点に行くのはとても大変ですが、
競技人口の少ないマイナースポーツなら、ある程度の才能でも、
練習を積めば日本の第一人者になることだって夢ではないということです。

マイナーな世界なんてつまらない、と思いますか？

もし、あなたがそう思っているとしたら、
とてももったいないので、面白いことをお教えしましょう。

それは、どんな小さな世界であっても、
そのトップになれば、他の分野のトップの人たちと
交流する機会に恵まれる、ということです。

小さな三角でも、その頂点は大きな三角の頂点と繋がっているのです。
三角形の大きさに関わらず、
その中のトップはトップ同士、
真ん中クラスは真ん中同士、
そして底辺は底辺同士で交流が行われるようになっているのです。

ですから、人脈ということで考えるなら、
三角の底辺が狭ければ狭いほど、
各界のトップの人たちと繋がりやすいポジションへ行ける可能性が
高くなると言えるのです。

人脈の「質」をアップさせるうえで大切なのは、
三角形の大きさではなく、
三角形のどこに自分が位置しているか、
ということだといえるでしょう。

それに、小さな三角は、
あなたが輝くことによって
大きな三角へと変貌を遂げる可能性も秘めています。

楽天の三木谷さんが今のビジネスを始めたときは、
まだインターネットで買い物をする人も、
自分の商品をインターネットで売ろうとする人も
ほとんどいない時代でした。

でも今、彼が描いた夢は多くの人を魅了するほど
大きな三角形に成長しています。

サッカーの三浦知良選手が
単身ブラジルにサッカー修行に行ったのは、
Jリーグはおろかプロサッカー選手など
日本には一人も存在していなかった時代です。
でも今や、プロサッカー選手は
子供たちのあこがれの職業のひとつです。

大きな三角の頂点に挑戦するのもすてきな夢ですが、
自分自身で三角を作り、
それを大きな三角に成長させていくことも、
とてもすてきな夢だと私は思います。